レガシー—美を受け継ぐ

モディリアーニ、シャガール、ピカソ、フジタ

2024 6.18(火)－10.13(日)

〒108-0071
東京都港区白金台5-12-6
松岡美術館
Matsuoka Museum of Art

本展では、当館の絵画コレクションより、19 世紀末から 20 世紀にかけて生まれた多彩な表現をご紹介します。舞台の中心となるのは、当時国際的な美術の中心地であったパリです。激しい色彩表現を特徴とするフォーヴィスムを起点として、20 世紀に連綿と生まれていった総勢 20 名以上の作家たちの作品を一堂に会します。

世界各地から芸術家が集ったパリでは、多層的な文化交流が起きました。作家たちは同時代の文化からだけでなく、遠く離れた過去にも眼を向け、インスピレーションを得ました。伝統的に培われてきた表現の規範が弱まるなか、国境、そして時代を超えた交流から生まれた表現の多様さは、過去に例を見ないものだったでしょう。

また、本展と連動して、常設展示からディエゴ・ジャコメッティ、エミール=アントワーヌ・ブールデル、ヘンリー・ムアの彫刻もご紹介します。彼らの表現は、古代や中世の造形を着想源としている点で共通しています。

本展を通して、文化のダイナミズムを感じ取っていただければ幸いです。

1 規範からの解放

1905 年、サロン・ドートンヌの一室に集められた激しい色彩表現を持った作品群は、観衆たちに驚きと動揺をもって受け止められます。のちにフォーヴ（野獣）と呼ばれることになるこの画家たちは、20 世紀に次々と生まれていく新たな表現の口火を切りました。

いまだ保守的な画家たちからは根強い反発があったとはいえ、19 世紀の末には印象派的な描き方は珍しくなくなり、新印象派やポスト印象派と称される動向も生まれていました。こうした新たな表現が生まれようとする時代に画家としての訓練を積み始めたフォーヴの作家たちは、自由な表現へと駆り立てられながら、その一方で自らの拠り所を必要としてもいました。彼らがまず参照したのは、ポール・シニャックやアンリ＝エドモン・クロッスに代表される新印象派の作品でした。明るい色彩に満たされた新印象派の画面は大きな指標となりましたが、彼らはじきに新印象派のあまりに理論的な描き方に窮屈さを覚え、新印象派的な表現を離れます。しかし、新印象派から学んだ色彩自体の持つ表現力は、彼らの新たな表現の起点となりました。

これが結実するのが、1905 年のサロン・ドートンヌにおける強烈な色彩表現を持つ作品の登場でした。その激しい表現から、とある批評家にフォーヴ（野獣）と形容されたことで、フォーヴィスムという呼称が定着することになります。しかし、ここに集まった画家たちは、理念を共有した運動を組織していたわけではありませんでした。実際、フォーヴィスムと呼ばれた動向の実体はすぐになくなります。フォーヴィスムの激しい表現が火花のように散ったのち、画家たちは各々の表現を探求していきました。

	作者名	作品名	制作年	材質・技法	寸法 (cm)
1	ポール・シニャック	オレンジを積んだ船、マルセイユ	1923 年	油彩・カンヴァス	55.0×69.0
2	アンリ=エドモン・クロッス	遊ぶ母と子	1897－98 年	油彩・カンヴァス	73.0×100.0

3	ルイ・ヴァルタ	海と岩壁と松	1906 年	油彩・カンヴァス	73.0×100.0
4	ルイ・ヴァルタ	黄色い背景と大きな花瓶		油彩・カンヴァス	150.0×100.0
5	キース・ヴァン・ドンゲン	マヨルカ島の女	1911−12 年頃	油彩・カンヴァス	99.8×80.7
6	ラウル・デュフィ	信号所	1924 年頃	油彩・カンヴァス	65.0×81.0
7	モーリス・ド・ヴラマンク	港のヨット	1910 年	油彩・カンヴァス	89.0×116.0
8	ジョルジュ・ルオー	道化師	1937 年	油彩・紙・板	42.9×32.6
9	ジョルジュ・ルオー	ブルターニュ教会の内部	1938 年	油彩・カンヴァス	70.5×108.0

床の間

渡辺 省亭　青梅に雀の図　1896(明治 29)年　絹本着色　113.6×41.0　6/18㊋～8/12㊊㊗

橋本 雅邦　鶺鴒図　1903−1906(明治 36−39)年頃　紙本墨画　50.2×71.2　8/14㊌～10/13㊐

錫釉藍絵山水人物図輪花鉢　ドイツ　フランクフルト窯　17 世紀後半　高 6.0　口径 29.5

2 西洋の外側へ

世界中から芸術家たちが集った 20 世紀初頭のパリ。彼らはパリで培われてきた伝統を学ぶというより、多様な文化交流のなかに身を置き、新たな表現を生み出していきました。そのなかで、彼らの表現の重要な着想源となったのは、西洋の外側の世界の造形物でした。

19 世紀から万国博覧会などを通じて、世界各地の造形物は広く紹介されていました。しかし、一般的にそうした造形物は単にもの珍しいものとして受容されます。一方、芸術家たちはそこに、自分たちとは異なる思考を読み取りました。

この時代は、西洋社会のなかで、自らの文化に反省的な眼差しが向けられ始めた時代でもあります。決定的な出来事は、第一次世界大戦でした。伝統的に理性を重んじ、進歩し続けてきたと思われていた社会が行き着いたのが、多くの犠牲を伴う世界規模での戦争であったからです。こうした状況を背景として、芸術家たちは鋭敏に、自らの文化や思考のあり方を相対化していこうとします。その視線は、アフリカや東洋、そして旧来の美術界の外側にいた日曜画家にまで及びました。

	作者名	作品名	制作年	材質・技法	寸法 (cm)
10	パブロ・ピカソ	ドラ・マールの肖像	1941 年	油彩・カンヴァス	61.5×46.0
11	パブロ・ピカソ	パイプを持つ男	1968 年	油彩・カンヴァス	162.0×114.5
12	アンドレ・ロート	腰かける裸婦	1925 年頃	油彩・カンヴァス	81.0×60.0
13	アレクサンダー・アーチペンコ	女の姿態	1923 年頃	油彩・厚紙	47.0×37.5
14	エドゥアール・ヴュイヤール	ウジェーヌ・フレシネ夫人の肖像（習作）	1933−34 年	泥絵具・紙・カンヴァス	165.0×98.0
15	アンドレ・ボーシャン	海岸	1928 年	油彩・カンヴァス	73.0×92.0

3 パリと日本人たち

明治時代に入り、文明開化によって、あらゆる面での西洋化が推進されるなか、「美術」もまた西洋からもたらされます。伝統的な日本美術を再評価する動きとの衝突、西洋美術の教育機関として設立された工部美

術学校の廃校などの紆余曲折を経て、1896 年には東京美術学校に西洋画科が設置されるなど、現在へと繋がる美術教育が制度的に整えられていきます。西洋美術の中心たるパリで培われた伝統は、洋画家たちにとってまず学ぶべき対象であり、多くの画家たちがパリに渡ることになります。

第二次世界大戦以前、最盛期には 200 人以上の日本人がパリに渡ったと言われています。そうしたなかで最もよく知られるのは、藤田嗣治でしょう。藤田はエコール・ド・パリの画家たちと交流しながら自らのスタイルを確立し、パリで成功を収めます。ここでは、藤田を中心として、当館コレクションからパリに渡った日本人画家たちの作品をご紹介します。彼らは日本人としてのアイデンティティを背景に、パリで出会った理想に学びました。

	作者名	作品名	制作年	材質・技法	寸法 (cm)
16	藤田 嗣治	聖誕	1918 年	油彩・カンヴァス	114.0×146.0
17	藤田 嗣治	二人の子供と鳥籠	1918 年	油彩・カンヴァス	81.0×65.0
18	田中 繁吉	紫紺の布	1981 年	油彩・カンヴァス	117.0×91.0
19	平賀 亀祐	マリエンブルグ		油彩・カンヴァス	50.0×65.0
20	山下 新太郎	黒部峡谷鐘釣附近	1932 年	油彩・カンヴァス	80.5×65.5
21	角 浩	私の真夏の夜の夢	1986 年	油彩・カンヴァス	194.0×162.0

4 エコール・ド・パリ

母国を離れ芸術の都パリに集った一群の芸術家たちは、のちにエコール・ド・パリと称されることになります。現在では幅広く、それゆえに曖昧に使われる「エコール・ド・パリ」という言葉ですが、当初はパリで活動する異邦人の芸術家たちを指す言葉でした。

彼らは生活に苦しむことも多かったため、必然的に家賃の安いアパートの周辺に集まり、近しい環境で生活を送ることになります。よく知られるのは、ピカソやキース・ヴァン・ドンゲンが暮らしたモンマルトルのバトー・ラヴォワール（洗濯船）、そして、シャガールやアーチペンコが暮らしたモンパルナスのラ・リューシュ（蜂の巣）でしょう。彼らは互いに刺激を与えあいながら交流を深めました。

一見してわかる通り、エコール・ド・パリの作家たちは理念や表現方法を共有していたわけではありません。彼らはそれぞれが持つ文化的背景を基盤としながら、パリという場所で起きていた文化交流のただなかに身を置き、自らの表現を探求していきました。

	作者名	作品名	制作年	材質・技法	寸法 (cm)
22	モイーズ・キスリング	裸婦	1925 年頃	油彩・カンヴァス	73.0×54.0
23	モイーズ・キスリング	女性像	1926 年	油彩・板	42.0×27.0
24	モイーズ・キスリング	シルヴィー嬢	1927 年	油彩・カンヴァス	103.0×71.0
25	モイーズ・キスリング	グレシー城の庭園	1949 年	油彩・カンヴァス	85.0×166.0
26	アメデオ・モディリアーニ	若い女の胸像（マーサ嬢）	1916–17 年頃	油彩・カンヴァス	70.0×43.0
27	モーリス・ユトリロ	モンマルトルのジュノ通り	1926 年頃	油彩・カンヴァス	54.5×65.3
28	モーリス・ユトリロ	モンマルトルのキュスティーヌ通り	1938 年頃	油彩・カンヴァス	57.0×70.0

29	モーリス・ユトリロ	モンマルトルの迷路	1942 年	グワッシュ・鉛筆・紙	37.0×56.5
30	マルク・シャガール	ラ・ペ通り	1953–54 年	油彩・カンヴァス	96.0×79.0
31	マルク・シャガール	画家と女	1964–68 年頃	グワッシュ・紙	62.0×51.0
32	マルク・シャガール	婚約者	1977 年	油彩・カンヴァス	100.0×73.0

展示替　29　ユトリロ　モンマルトルの迷路　6/18 ㊋～8/12 ㊊㊗
　　31　シャガール　画家と女　8/14 ㊌～10/13 ㊐

5 女性作家の登場

歴史に名を残した女性の芸術家をあげてください、と言われて、すぐに名前があがるでしょうか？なかなか名前が出てこない人も多いはずです。というのも、西洋では長らく、女性が芸術家としての正統な教育を受けることは制度的に困難だったからです。女性にはそもそも、芸術家になるチャンスを与えられること自体が、男性に比べて圧倒的に少なかったのです。しかし、アカデミーの権威が弱まるなかで、表現上の自由を探求しようという動きは、女性をも巻き込んでいきます。ここにご紹介するシュザンヌ・ヴァラドンとマリー・ローランサンは、女性芸術家の先駆けと言える存在です。

	作者名	作品名	制作年	材質・技法	寸法 (cm)
33	シュザンヌ・ヴァラドン	コンピェーニュ近くの古びた製粉所（オワーズ県）	1914 年 10 月	油彩・カンヴァス	74.0×92.0
34	マリー・ローランサン	帽子をかぶった少女	1924 年頃	油彩・カンヴァス	84.0×36.0
35	マリー・ローランサン	若い女	1937 年	油彩・カンヴァス	46.0×38.0

二度の世界大戦が勃発した激動の時代は、パリを、そしてそこに集った芸術家たちをも巻き込まずにはいませんでした。戦争という惨禍は、物理的に世界を破壊するのみならず、人々を精神的にも疲弊させました。第一次世界大戦に従軍したヴラマンクは、文化の中心であるパリを離れて、自然豊かなパリ郊外に移住し、制作を続けました。また、ユダヤ人だったシャガールは、第二次世界大戦中にアメリカへの亡命を余儀なくされます。パリを離れた彼らの作品に、パリ時代や故郷を思わせる表現が見られるのは偶然ではないはずです。

6 パリから離れて

一方、戦争が引き起こした文明への信頼の失墜は、新たな表現が生まれる契機ともなりました。1924 年に発表された宣言とともに始まった芸術運動・シュルレアリスムは、理性に基づいた秩序だった表現を放棄し、人間の無意識による表現を探求しました。ジョルジョ・デ・キリコとポール・デルヴォーは、ともに運動としてのシュルレアリスムに直接関わることはありませんでしたが、彼らの作品はシュルレアリストたちに称賛されます。二人はともに、古代の情景や神話をモチーフに、どこか不可思議な風景を描きました。

	作者名	作品名	制作年	材質・技法	寸法 (cm)
36	モーリス・ド・ヴラマンク	スノンシュ森の落日	1938 年	油彩・カンヴァス	60.0×73.0
37	マルク・シャガール	青い鳥	1944 年	油彩・カンヴァス	79.0×52.0
38	ジョルジョ・デ・キリコ	馬術訓練	1957 年	油彩・板	35.0×55.0
39	ポール・デルヴォー	オルフェウス	1956 年	油彩・パネル	120.0×170.0